

2019年8月25日 創価大学オープンキャンパス

PASCAL 入試～体験 LTD

< 予習教材 >

* 8月25日オープンキャンパス用の予習教材です。実施日ごとに教材を指定していますので、参加する回の予習教材を必ず予習してください。

大倉 喜八郎「わが処世障」

雑誌『雄弁』第19巻第2号（大日本雄弁会＝現在の講談社、1928年）より

自分も今年は九十二歳、あまり短い生涯ではなかった。で、折々、静かに己れの生涯を振り返ってみては、これでも多少の仕事をしてきたなと思うが、そういう時にいつも考え出されるのは、多少とも仕事の出来た源泉は何処にあつたろうかということである。が、これは、若い時にはその源泉が解らなかつた、いや気付かなかつたのだ。

というのは、その源泉はかなりに私の性格から来ているもので、私は他人のように苦心修養してこういう性格をつくりあげたわけではないからである。したがって私は、他人にむかつて道を説いたり、いわゆる成功の要訣を教えたりなどしようとは思わない。ただ御希望に従って、私は斯くあつた、斯くの如き道を踏み進んできたということ述べるまでのこと。もし多少とも処世上の参考にでもなり、私の言に聞くものがあれば、幸甚の至りに耐えない。

まずいいたいのは、人間の知恵にはさほどの差はないということである。もちろん天才は別物であるが、普通の人間においては、知恵の相違は大体において教養の差、年齢の差、ないし経験の差などから来るもので、世の成功者必ずしも人に卓越した知恵を恵まれていたというわけではない。幾分の優れた点はあるかもしれないが、

それは教養や経験や努力などによって補い得べき、また達し得べき相違である。結局普通の人間は俗に言う、どんぐりの背くらべである。

そこで教養や経験や年齢が大体似通った人の間において、成功不成功の岐路はその人の努力如何にあるということになる。そしてこれは普通成功の要訣として、もろもろの世の成功者ないしはまた識者などによって説きつくされ、繰り返されていることである。が、私は思う。いかにも努力は成功の鍵に相違ないが、畢竟、それは形にあらわれたもの、換言すれば、さらに深い所に存する原因が、努力という結果になつてあらわれたに過ぎないのではなからうか。

思うに、人間の成功不成功というようなことは、ただ努力というものに支配されるのではなく、そこにはもっともっと深い重大な原因が潜んでいるのではあるまいか。つまり努力を生む何物かがあつて、それが機に臨み、変に応じて努力ともなり、勇氣ともなり、果敢ともなり、熟慮ともなり、その他色々の徳目となつて事にあたることになる——私にはどうもこう思われる、いや私は、自分のことからそう考えるのである。

しからばその源泉、すなわちこれらの結果を生むある物——それは一体何か。一口にいうと、それは、生きていく上の覚悟、今の言葉で言うと生活覚悟とでもいおうか。たしかにこの生活覚

悟の有無ないし強弱ということが、人の一生を支配するように思われる。

たとえば、ここにある人がある要求を持ってきたとする。その時、これに「イエス」というか「ノウ」というか、そこをハッキリさせなければならぬのだが、そして生活覚悟の強いものならばそこをハッキリさせて進むのであるが、生活覚悟の弱いものやトンと覚悟のついていないものは、心中否ひとすることも色々の情実ひに捉われてキッパリ「ノウ」ともいえず、さりともちろん「イエス」でもないということになる。

私がいいたいのはこの点である。常に緊張した精神と強き意志じとを持して、「ノウ」はハッキリ「ノウ」とし、「イエス」はハッキリ「イエス」として、いつまでもその一事ひとことに捉われず、次から次と進み行く——つまり常に生々澁刺せいせいほつらつの活気をもって人生百般の事にあたり、事にこだわらぬのだ。いつまでも一事いちじに拘泥こうでいなどせず、過去のこと終わったことはこれをキレイに忘れて、新しき道に生き生きと進んで行く。この覚悟がいわゆる、私のいう生活覚悟で、いわば太く強い金属の線をピーンと張り切ったような態度で進んで行けば、期せずして成功の彼岸に達しうる。

ところでこの覚悟は、生まれつきそういう性格を恵まれている人と、そうでない人とあるが、そういう性格を恵まれなくとも、修養いかんの如何によって段々に自分の性格をそういうように鍛え直していくことも出来よう。ここにおいて修養ということが必要になってくる。とにかく私自身の生涯は、たしかにこの覚悟をもって終始した。だから努力しようなどと意識して努力したのではなく、この覚悟から自然に努力が湧いてきたのだと思う。難関に処して忍耐も出来たの

だと思う。また非常の勇氣も出たのだと思う。

イタリーのムッソリーニは、「躊躇ちゅうちよするなかれ」ということを、統領たるものの覚悟としてあげているが、さすがに物を道破している。事にあたって、右は右、左は左、諾は諾、否は否として躊躇しないことが出来れば、それでも立派に人に統領たることが出来る。が、これは実にむずかしいことだ。ムッソリーニのように、太く強い金属線を張り切ったような生活態度の人なればこれをいいうるのであり、実行も出来るのだと思うが、移してもって成功の要訣ともなすことができると思う。

これを思っても、努力とか勤勉とかいうことが成功の要訣とされているが、私はこの努力や勤勉の根源をなす精神ないし魂を、まずもって培い鍛えることが必要であると信じている。